夢幻舞踏会

菊地秀行

Novels

大和ノヴェルス
夢幻舞踏会
1985年9月20日　第1刷発行

著者　菊地秀行
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口1－33－4　〒112
電話番号(203)4511
振替　東京6-64227
印刷所　暁印刷
製本所　東京美術紙工
装幀　高麗隆彦
装画　佐竹美保
©1985　Hideyuki Kikuchi　Printed in Japan
ISBN 4-479-56002-5
落丁本・乱丁本はお取替します

夢幻舞踏会

菊地秀行

夢幻舞踏会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

Part Ⅰ ゆきえ——7
Part Ⅱ 長き眠り——37
Part Ⅲ 舞踏会の夜——63
Part Ⅳ 幻の港町——91
Part Ⅴ 影の人々——137
Part Ⅵ 眼醒めたもの——183
あとがき——217

Part I — [illegible]

I

研究所の父に、忘れていった弁当を届けてから、ゆきえは駅まで自転車をこいだ。

風とひかりが身体にぶつかっては砕けてゆく。研究所の坂道をノー・ブレーキで降ると冷汗がでたが、駅前に着く頃には、首筋や腋の下に別種の汗が滲んでいた。薄いジーンズの内側にも湿り気が粘ついている。

駅の自転車置場はいつものように銀輪の群れが占拠済みだった。陽光が車体を銀色に溶かしている。

少し離れた歩道の隅にそっと自転車を停め、鍵をかけて構内へ入った。低い石の天井がひかりと八月を遮り、ゆきえのTシャツを昏く染めた。

軽く息を吐いて、売店脇の自動販売器へ向かう。

コカコーラとファンタの缶を吐き出す自動販売器は、「夢成市（YUMENARI）」の七不思議のひとつだ。売店でも、ひなびた皮膚の中年婦人が同じ缶を売っているし、汗みずくの客が殺到して彼女の手が足りなくなるということは考えられない。

列車の通過と停・発進以外は、物音ひとつしない駅である。改札係さえ姿を消してしまうとき

がある。たまに見かける駅員の顔も、ゆきえの記憶にはないものが多かった。
自動販売器は、ゆきえひとりのために置かれたものかもしれなかった。
百円銀貨を挿入し、勢いよく転げ出てきた缶を取ってリングをはずす。
小気味よい炭酸の叫びも、噴き上がる水粒も、ゆきえの好みだった。
ひと口分を喉へ。
前と同じ味がした。
奇妙な考えがゆきえの胸に点った。
前？――いつのことだろう。
喉をくすぐる刺激がそれを忘れさせた。ふた口目を飲み下す寸前、ゆきえは珍らしい現象に出喰わした。
事務室のドアを開けて、半袖シャツの駅員が姿を見せたのである。
けだるい足取りで改札口へと歩く。
ようやく、男声のアナウンスが、横須賀行き普通電車の接近を告げた。
理由もなく、ゆきえは、この街へ降りる人々の姿が見たいと思った。
ホームの向うに広がる蒼空を白とグリーンの車体が覆い隠し、発車ベルが鳴りはじめる頃、白い人々の列が改札を通り抜けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

意外と多い人数が、ゆきえに奇異の感を抱かせた。
平日の昼である。
半袖シャツにネクタイ姿の男たちが目立つ。
これほどたくさんのサラリーマンたちがどこへ行くのだろうかと思った。
帰宅時間ではあり得ない。
自分自身の心に湧いた疑問を、ゆきえは軽く打ち消した。
駅の前で何度も見かけた光景である。
高校に通っていたある日、彼らの運命について考察したことをゆきえは思い出した。
それから過ぎた七三〇日分の月日は、その考えに苦笑を浮かべるだけの余裕と成熟を彼女に与えたようであった。
人々の群れは駅前の白光に溶けた。
缶に残る最後のひと口を飲み干し、白いハンカチで軽く唇を拭ったとき、ゆきえは、この街に何かが起こりつつあるのを知った。
電車の震動はとうに去っている。
改札口を抜けた青年は、長いこと、独りぼっちでホームに立っていたように思われた。
切符を差し出し、構内を歩み出す。

白い麻の上下は、皺のひと筋ひと筋から肩のほつれまではっきりと見えた。
外の光にあたっても、彼だけは溶けることがないだろう。
ちらりとゆきえの方に眼をやり、すぐ向き直って、青年は黒いニット・タイで額の汗を拭った。
馴れた仕草である。
黒いボストン・バッグが右膝の隣りでゆれている。
ゆきえは黙って見送った。
風が頬をなでる。
澱んだ夏の空気が前触れもなく動き出し、海辺の街に特別な日々が訪れようとしていた。

「知っとるかね?」
珍らしく、重い口調で父が切り出したのは、その晩の夕餉の席だった。新聞の向うから洩れる声は、例によって誰に話しかけているのでもないようにきこえ、ゆきえも母も、あわてることなく、口腔内の魚を咀嚼した。
父の興味をひいた記事は何だろうと、ゆきえは頭を巡らせた。母と二六年、自分とも二〇年の付き合いになるが、無味乾燥な科学記事を食卓で蜿々と通読する癖は死ぬまで治るまい。
今日は意表をつかれた。

「帰りがけに業者が来て教えてくれたんだが、『ハート・ブレイク』に誰かが入ったらしいな」
ハート・ブレイク
惜しいことに、
HEART BREAK HOTEL
ではなく、
ホテル・ハート・ブレイクだ。
青とピンクのネオン・サインに飾られた看板は、Lの字が半ばから折れ曲がり、アルファベットのIに成り果てていた。支配人もそれを治さず、そのうちに他の文字も光りを失った。
ゆきえが、ホテルのガラス扉に鍵がかかっていると知ったのは、二年まえの夏だった。修理代に関して賢明だった支配人は、他所の街で亡くなったらしい。
「じゃあ、『スタンダード』も開くのかしらね」
ゆきえは別の声が自分の質問を放つのをきいた。
ホテルの窓に全室明りが点り、一階のバーからジュークのざわめきが絶えなかった頃、彼女はゆきえと同じくらいの年齢だった。親子の絆をとっ払い、どちらかの属する時間を調節すれば、格好の好敵手になったかもしれない。
母の眼は新聞を射抜いていた。

「空巣かもしれんよ」
父は夢の破壊に快感を感じているのだろうか。
「明日になれば警察が捜査にいくだろう。ホテルを養うだけの人数がこの街にはないんだ」
ゆきえの眼蓋の裏を、ワイシャツ姿の群れが通り過ぎた。
二年前に、ある少女が彼らの運命について、適切な評価を下した。
彼らは何処へ行くのだろうか。
眠ったような海辺の街でセールスをし、上り電車で家路を辿る。夕闇に閉された家の窓は白い光に満ち、妻と子が肩を揉もうと待ち構えている。平凡な幸福の縮図に全員当てはまるのか。
いや。
母が何か言いかけたとき、玄関のベルが鳴った。
ゆきえが立ち上がって廊下へ出た。
ガラス戸の向うに、白いシャツ姿が滲んでいる。
鍵をはずすと、ステテコ姿の隣りの主人だった。
顔色が黒っぽいのは、三和土の真上の電球が切れかかっているせいばかりではあるまい。
「お父さん、いるかね?」
外を見ながら訊いた。誰かが待っているのかしら、とゆきえは思った。

主人の表情がゆきえに躊躇を許さなかった。
すぐ、父を呼んで戻った。
父の顔を見るとすぐ、主人は話しかけた。
「ここへは来なかったかい？」
言い終わってまた外を見る。ゆきえと父は顔を見合わせた。キッチンから母も出て来た。
「来なかったかね？」
と主人は繰り返した。
「誰がだね？」
父が訊いた。
「いま、庭に出てたら、垣根越しに挨拶していくんだよ。いや、すぐにはわからなかった。それだけで、行っちまったからね。少しして気がついた。ありゃ、支配人だぜ」
ゆきえは父より母の顔が気になったが、何故か確かめたくはなかった。
「支配人？」
「『ハート・ブレイク』のさ」
「あの男は亡くなったはずだがね」
「知るもんか。いま、ちゃんと挨拶して通った。そういやあ——」

主人は手で首筋を撫でた。顔影はますます濃くなったようだ。
「ちゃんと、黒のスーツを着てたよ。昔通りに。蝶ネクタイもしめてよ」
「靴はピカピカに磨いてあったかね」
父の問いに主人は首を振った。
「そういや、そうだったな。いや、そこまでは見なかった」
ゆきえはようやく母に顔を向ける気になった。廊下の電灯のまたたきが、幾つもの表情を母に与えていた。怒りと哀しみと歓びと……その繰り返し。怒りと哀しみと歓びと……
電球を取り替えねばなるまいとゆきえは思った。
気がつくと、主人が父の顔に指を突きつけていた。
「あんた、学者だろ。追いかけてってみないかね?」
「幽霊に興味はない」
「幽霊なものか。生きた人間さ。足音だってきいたんだ。月が明るいから、影だってちゃんと見えたよ。そうさ、歌を歌ってた。なんてったっけな、『スタンダード』でよくかかってたやつさ。ええと——そう、〝いつでも〟だ」
「〝いつまでも〟よ」
母の声を耳にしたのはゆきえだけだったのかもしれない。後の二人は、廊下に眼をやろうとも

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo